

記憶の継承のための災害復興プロセスの 共有に関する研究

古賀 健太¹・田中 尚人²

¹学生会員 熊本大学 自然科学教育部土木建築工学専攻 (〒860-8555 熊本市中央区黒髪2-39-1)

E-mail: 190d8355@st.kumamoto-u.ac.jp

²正会員 熊本大学准教授 熊本創生推進機構 (〒860-8555 熊本市中央区黒髪2-39-1)

E-mail: naotot@kumamoto-u.ac.jp

平成28年の熊本地震から約3年を経た現在、災害時や復旧・復興における課題を明らかにし、被災の軽減、速やかな復旧・復興、他地域への教訓を得るために、記憶の継承が重要だとされている。

本研究の目的は、被災地における復興プロセスの実態を記述し、共有するための仕組みを構築することである。そのために、熊本県上益城郡益城町平田・柳水地区において、11名の被験者の記憶・経験をオーラルヒストリーの手法によりまとめた。その結果、被験者にとってありのままの事実を聴取できたが、その内容は、震災直後の被害や避難の意向等に偏っており、復興過程のエピソードを聞くことはできなかった。そのために追加でヒアリング調査を実施し、復興過程を明らかにした。復興のきっかけには、「他者との関わり」と「生活環境の変化」の2種類に大別できた。

Key Words : *transmission of memory and experience, oral history, restoration, reconstruction*

1. はじめに

(1) 本研究の背景と目的

2016年4月14日、16日に発生した熊本地震では2度の震度7の地震を観測し、多くの死者や被害を出した。現在、熊本地震から3年目を迎え、災害時の課題や取り組みを見直し、震災による被害の軽減と速やかな復旧・復興を目指すための記憶の継承を行っている。

そこで、本研究の目的は、オーラルヒストリーによって集まった被災地の記憶と被災体験をまとめ、災害復興プロセスを共有することである。それにより、熊本地震における復旧・復興の一助となるための提案をするとともに、次世代や全国への課題や教訓の伝承を行い、減災・防災・復興まちづくりへと役立てることとする。

本研究において災害復興プロセスとは、「発災から、①被災直後、②避難期、③復興期の主に3つの時期における災害に対する応急対応から復旧・復興」と定義する。

①被災直後では、被災時の教訓等、②避難期では、仮設住宅での生活やコミュニティ再編等を主に災害がまだ発生していない未災地に共有し、減災・防災にへと役立てる。また、③復興期では生活再建や復興まちづくり等を、主に被災した地区内に共有し、今後の復興まちづく

りや記憶の継承を行うことを目的とする。

(2) 既往研究

本研究では、住民の熊本地震に関する記憶を収集し、それらを後世や全国に伝承していくために、インタビュー調査と異なり、調査の対象者が体験や記憶に関して自由に語るというオーラルヒストリーを採用した。オーラルヒストリーは日本語で“口述歴史”、“口述記録”と呼ばれる個人が体験した過去の出来事などを個人の語りにより収集し、記録することで歴史を再構成しようとする試みである。

そして、オーラルヒストリーは社会学や政治学の分野で用いられ、調査の対象を公人としてきたが、近年では、生活史における一般市民なども調査の対象とされてきた。

また、中神ら¹⁾はまちづくりへ活かすことを目的としたまちづくり・オーラル・ヒストリーと呼ばれる手法を用いて研究をしている。この場合、地域住民との対話による調査から地域に対する記憶を収集し、市町村誌等の記録に現れることの少ない地域の暮らしの記憶を、顕在化したうえで地域に還元するものである。これによる地域像の再発見・再認識を、今後のまちづくりへ活かすことを目的としている。

また、西村ら²⁾は住民から熊本地震に関して地震発生から5ヶ月間の期間における地域住民の行動や経験などをオーラルヒストリーで収集し、地域の内部と外部のつながりを分析している。しかし、震災に関して、住民の経験や教訓などを後世や全国に伝えるための手段や、被災した地区の住民が主体となるこれからの復興についての研究は少ない。

2. 研究対象地概

(1) 益城町平田・柳水地区の特徴

益城町は熊本県のほぼ中央にあり、東西約 11 km、南北約 13 km、周囲 45 km で面積は、65.64 km²である。行政域としては上益城郡に属し、その北部に位置する。西から北西は熊本市と接している。熊本県庁等の行政機関に程近く、熊本空港、九州自動車道、益城熊本インターチェンジ等を有し、交通網及び立地条件の優位性から近年は人口が増加し、大規模な開発工事が急増している。

平田地区は、益城町の北部中央に位置し、南北にかけて細長い地形となっている。南部には木山川が流れ、平田上、平田中、平田下、平田西、平田境に加え北部に独立して位置する黒石崎と6つの居住集落が形成されている。それ以外の地帯は、全体的に農業地帯が大部分を占めており、地区の南部には布田川断層が通っている。

また、柳水地区は益城町の北東部に位置し、地区の西は平田地区に接している。集落は、地区内には町道川内田平田線を軸に形成されており、地区北西部にはマミコウロードが通っている。地形は、集落全体としてみると平坦な箇所はあまりなく、起伏に富んでいる。以前まではバスが運行されていたが、現在は運行停止しており、柳水地区と益城町中心部をつなぐ公共交通がない。



図-1 益城町平田・柳水地区概要(筆者作成)

(2) 社会的特徴

住民基本台帳人口³⁾によると平田地区の人口は熊本地震がある前の平成28年3月の時点で604人であるが、熊

本地震後の平成29年で585人、平成30年で581人と人口は減少傾向にある。同じく柳水地区の人口も平成28年3月時点で53人であるが、熊本地震後の平成29年で53人、平成30年で43人と減少傾向である。また、平成27年の国勢調査で、益城町は人口33,611人に対し65歳以上が8,975人と全体の約26.7%であるが、特に平田地区は人口609人に対し、65歳以上が223人と全体の約36.6%と非常に高齢化が進んでいる地域であることがわかる。

以上のことより、益城町平田・柳水地区は震災により人口減少が見られ、高齢化が進んでいる地域であることがわかる。

(3) 益城町の震災被害

気象庁⁴⁾によると、平成28年4月14日21時26分に熊本県熊本地方で深さ11 km、マグニチュード6.5の地震が発生し、熊本県益城町で震度7を観測した。また、平成28年4月16日1時25分に熊本県熊本地方で深さ12 km、マグニチュード7.3の地震が発生し、熊本県益城町と西原村で震度7を観測した。この短期間における2度の震度7を超える地震は前者は前震、後者は本震と言われ、これらの地震をはじめ、熊本県を中心とする一連の地震活動について、「平成28年(2016年)熊本地震」と命名された。また、1ヶ月後の5月14日までに観測した震度1以上を観測した回数は3,385回と多くの余震があった。

また、益城町では、平成28年熊本地震益城町による対応の検証報告書⁵⁾によると道路や橋などのインフラストラクチャーの損害や上・下水道や電気・ガスの供給が停止したことで復旧作業が遅れた。携帯電話も発災当初は混信・不通といった状況が見られたため、通信事業者の協力により公衆無線LANサービスの無料開放が実施された。避難に関しては、青空避難や車中泊避難者が多発し、指定避難所になっていない自治公民館や自宅の庭先に避難している人も多数存在した。避難所は過密状態にあり、解消に向けた取り組みや、要配慮者へのきめ細やかなケアが課題となった。また、被災した避難所の応急修理や避難所増設により過密状態を解消しようとした。他にも、益城町陸上競技場では、自衛隊らによりテント村と呼ばれる避難者用のテント群を用意し、対応した。

熊本県危機管理防災⁶⁾によると、益城町の住家被害は10,742棟のうち全壊・大規模半壊が3,817棟と全体の約35.5%である。また、益城町平田地区の住家被害は、268棟のうち全壊・大規模半壊が113棟と全体の約42.2%であり、益城町柳水地区の住家被害は18棟のうち全壊・大規模半壊が13棟と全体の約72.2%であることから益城町の中でも被害が大きかった地域であることがわかる。

地域の復興に関しては、平田地区は12年に1度開催される伝統的な祭りである「お法使祭」を平成28年の熊本地

震後は平成29年に「復興お法使祭」として開催された。また、平成29年12月に熊本地震からの復興及び住みよい地域環境をつくり、育てることを目的とする平田・柳水地区郷づくり協議会が設立された。これらの熊本地震後の平田・柳水地区での出来事を表-1にまとめた。以上のことより、益城町平田・柳水地区で震災により多大な被害を受けたが、地域住民が主体となって復興を目指すコミュニティであることがわかる。

表-1 熊本地震後の平田・柳水地区での出来事

年	日付	平田・柳水地区の出来事
2016年	4/14	熊本地震(前震)
	4/16	熊本地震(本震)
	6/14	応急仮設住宅への入居開始
	6/21	豪雨による河川堤防の決壊
	10/31	総合体育館避難所を閉鎖(町内の全ての避難所を閉鎖)
	12/25	まち歩き
2017年	3/10	第1回平田郷づくり協議会
	3/31	町内に210世帯514人の住民が仮設住宅で生活
	5/25	第1回柳水郷づくり協議会
	9/26	平田・柳水郷づくり協議会設立総会
	10/31	復興お法使祭
2018年	3/31	平田・柳水郷づくり協議会によるイベント「平田まるごと郷歩き」の実施
	3/31	町内に267世帯550人の住民が仮設住宅で生活
	10/30	神事のお法使祭
	11/17	平田・柳水郷づくり協議会によるイベント「平田・柳水郷づくり祭り」の実施
	12/13	熊本地震による益城町の死者45名、全壊3026棟

を行った対象者リストを表-2に示す。合計11名に1回、1～2時間、用意した質問のテーマ(①災害時、②車中泊、③避難所、④仮設住宅、⑤復旧・復興)を参考に熊本地震についての被災体験と記憶を話していただいた。これらの内容は、ICレコーダーによる音声記録を文字起こしをする作業を行った。それらの資料を基に収集した記憶の内容をまとめた。

表-2 オーラルヒストリー対象者リスト

	年齢	性別	住まい	日時
A	70代	男	平田	2018/11/19 9:00
B	70代	女	平田	2018/11/19 9:00
C	60代	男	平田	2018/11/22 10:00
D	60代	男	平田	2018/11/26 13:00
E	70代	男	平田	2018/11/26 14:00
F	60代	男	柳水	2018/11/26 15:30
G	70代	女	平田(仮設)	2018/11/27 14:00
H	60代	男	平田	2018/12/5 18:30
I	30代	女	柳水	2018/12/10 14:00
J	40代	男	平田(宮園)	2018/12/20 9:00
K	40代	女	平田(宮園)	2018/12/20 9:00

(2) 被災体験の時空間へ整理

収集した記憶からわかった災害復興プロセスにおいて1年間の対象者の避難時期と避難場所をわかりやすくするために図-2を作成した。また、避難場所を「地区内」、「地区外」、「仮設住宅」に分類し、家に入って生活を始めた人を「自宅」とした。前震では、自宅で被災した住民が多かったが、本震の時は、自宅で被災した住民や車中泊中に被災した住民、地区外で被災した住民とそれぞれ状況が異なった。また、地区内避難は、家の小屋や庭での車中泊と地区内にある避難所が見られた。地区外避難は、地区外の避難所か町外の施設や親戚の家などが見られた。

3. 平田・柳水地区のオーラルヒストリー収集

(1) オーラルヒストリーの収集

2018年11月19日～12月20日の約1ヵ月間に研究対象地の住民にオーラルヒストリーの収集を行った。調査

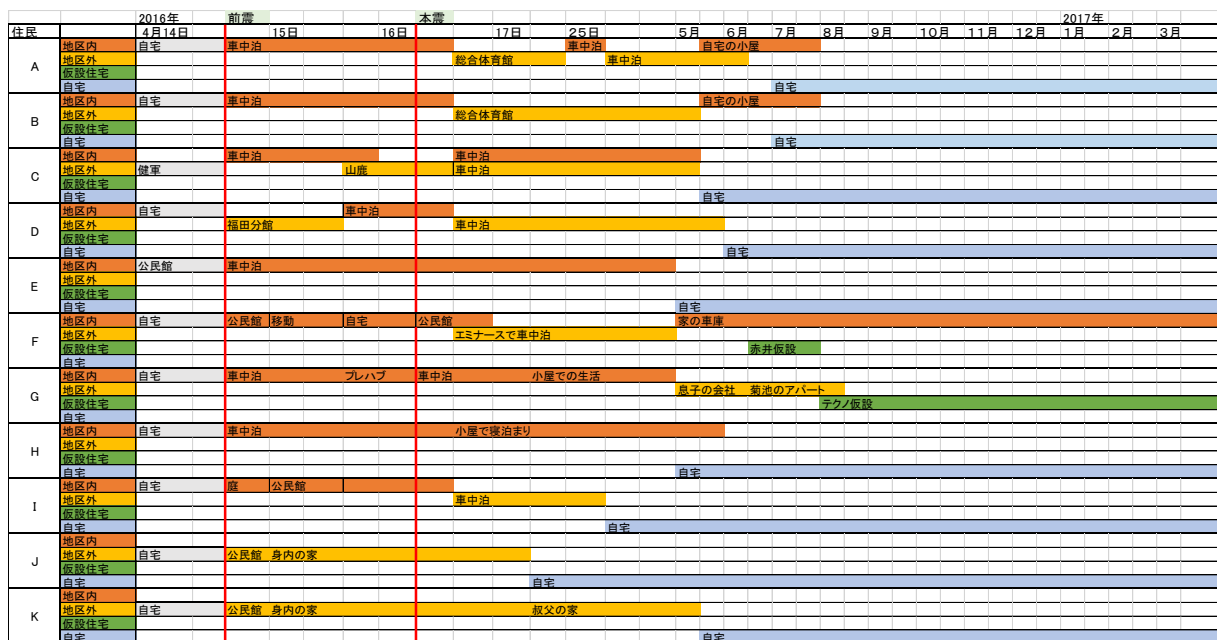


図-2 調査対象者の避難場所と時期

(3) 記憶や被災体験の割合

記憶や被災体験の割合を分析した。記憶を被災したときの状況である①災害時、被災後の生活環境の項目別に②車中泊、③避難所、④仮設住宅、⑤復旧・復興、それ以外の⑥その他の6種類に分別し、それぞれの内容の文字数で全体の合計の割合を図-3に示す。

図-3より、全体的に⑤復旧・復興のこと③避難所のこと①災害時のことの順に記憶が多く収集された。⑤復旧・復興の③避難所のことに関して記憶が多く収集されたのは、調査対象者の中でも課題が多くあり、記憶に残る体験があったからだと考えられる。①災害時のことに関して記憶が多く収集されたのは、短い期間にもかかわらず、とても印象的な大きな被害があったからだと考えられる。しかし、②車中泊の④仮設住宅のことは全体の5%以下しか収集できなかった。このことは、図-2より、車中泊や仮設住宅は、調査対象者の中でも体験した人が限られており、それらを経験していない人は内容をあまり話さない傾向にあった。

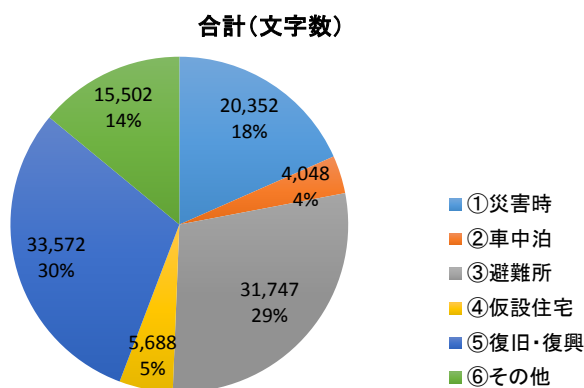


図-3 全体の記憶の種類別割合

(4) 被災体験の特徴

対象の地域住民から収集した記憶や震災体験を①災害時、②車中泊、③避難所、④仮設住宅、⑤復旧・復興、⑥その他の6つのカテゴリーに分類した。記憶の種類別傾向にどんな特徴があったのかを整理した。また、これらの収集した内容の一部を表-4に示す。

a) 「災害時」に関する特徴

急に発生した震災に気持ちの整理がつかず何が起きたのかわからないような生活を一変させるような被害の大きさであったとわかる。また、前震で被害により、次の日は車中泊をしたり、避難所へ行くことで本震での人的な被害を防ぐことができていた。しかし、車中泊でも、大きな揺れにより車でも耐えられないほどの被害であった。

b) 「車中泊」に関する特徴

自宅の庭での避難生活と避難所の駐車場で避難生活があった。夜は、暗い中で生活で女性や子供などは特に恐怖心や不安などもあった。車中泊では、十分な広さ

がなく足が延ばせないなどの不便のある避難生活となったことがわかる。また、そのような環境の中で車中泊を数日間続けることでエコノミークラス症候群にかかりそうになるくらい気分が悪くなるような例もあった。また、避難所の駐車場では、十分な駐車スペースがなく、場所の取り合いが発生し、車の出し入れも困難となった。

c) 「避難所」に関する特徴

地区内では公民館などの避難所・自宅の庭などを避難所として車中泊をした人・自宅の小屋を避難所として生活した人が見られた。特に地区内の自宅の庭で避難生活をした人は支援物資や被害の状況などの情報が入りやすかった傾向があった。だが、地区内で避難することで自宅への不審者の侵入を防いだり、自宅の片づけをしたりする行動が可能となった。特に、地区内で避難生活をしてきた人は、「食事は家に野菜や米など作っているから困らなかった」というような住民もいて、農村ならではの助け合いも見られたという。

地区外では、地区指定の避難所で生活した人もいれば、県外の知り合いの家や地区外のアパートを避難所として生活した人もいた。それぞれの避難場所で異なった状況や課題もあった。地区外の避難所に行くことで、支援物資が届きやすいという利点もあったが、自宅からの距離が遠いため自宅に帰りにくかったり、自宅がどうなっているか不安を抱えたりする問題もあった。また、地区外の避難所では、数多くの被災者が押し寄せ子どもや高齢者のみの開放に限られ、残りの人は車中泊をするなど場所に限りがあった。さらに、顔の知らない人同士の生活で人間関係にも課題があり、避難所へ行った人はいち早く地区へ帰る傾向があった。

d) 「仮設住宅」に関する特徴

狭くて生活しにくいことや、隣の部屋の生活音が響いていたことで、普段の生活とは異なり、ストレスのある生活であることがわかった。また、仮設住宅団地のコミュニティとして、最初は知らない人が多くて不安を抱えていたが、仮設住宅で開催された複数にわたるイベントにより、近所との交流が増えた。安否確認をする立場では、プライバシーの関係上、地区の住民の仮設住宅での住まいを役場から教えてもらえないなど課題もあった。

e) 「復旧・復興」に関する特徴

自宅の復旧の段階として大きく3つに分けられた。まずは、避難所から自宅内での生活を再開させるための自宅内の簡単な生活環境の確保である。これは、家具の片づけや水・ガス・電気などのライフラインの緊急な復旧が挙げられる。この段階では、個人やボランティアによる片づけが見られた。まだ自宅に戻れないような住民は貴重品や生活に必要なものだけを取るために簡単に片づけをするなど簡易的な復旧作業もあった。

次に、安心できる生活を送るための環境の確保である。

これは、家の基礎となる地盤や屋根や柱など個人ではできないような費用がかかる復旧である。この段階では、多大な費用もかかることや別の地区に改めて建てるか修理をするかなど決断に迷いがあった。

最後に元の暮らしを取り戻すための環境の確保である。これは、周囲の擁壁や小屋など元の生活をするために必要な復旧である。この段階では、ドアのずれや小屋の修理など生活には大きな支障がないためそのままの状態か、後回しにする傾向があった。

f) 「その他」に関する特徴

地震による二次的な被害について述べられる傾向があった。二次的な被害として、地震による恐怖心と精神的なストレスによる病気などが、地震から2年経っても地震による心境や体調面で影響があることがわかった。

(5) まとめ

本章では、オーラルヒストリー調査によりそれぞれの対象者の被災体験が明らかとなった。

話した内容の記憶の種類割合は人それぞれで異なり、被災者ごとに記憶している被災状況や気持ちを主観的視点で把握することができた。しかし、全体として、災害直後からおおむね1年もしくは現在のことに集中しており、追加のインタビュー調査が必要であることが明らかとなった。また、対象者はそれぞれ異なる環境で避難場所ごとに特徴や課題も見られた。益城町平田・柳水地区は現在も復旧・復興が行われているが、不安や課題を抱えながら進んで

いることがわかった。人間関係や精神的なストレスなど目に見えない二次的な被害が現在もあり、今後の復旧・復興における課題もあった。

オーラルヒストリー調査では、震災が起こった時点から時系列で対象者が被災体験を語っていくうちに、記憶を掘り起こしながら、思い出すことができるような場面が多く見られた。また、語りに対し頷くなど、共感を持つことでさらなる被災体験を引き出すことができた。このようにオーラルヒストリー調査を行ったことは、当時の曖昧な記憶や被災者しか体験していない情報を収集する点で有効であった。

4. 災害復興プロセスの共有に関する分析

(1) 調査結果

調査の対象者に対し、以下の質問事項を用意して多くのことを収集できなかった1年後と2年後の記憶と気持ちなどの変化を明らかにするため追加ヒアリング調査を行った。この結果を図-4に示す。

質問1：あなたが震災の1年後の2017年4月、2年後の2018年4月はどのようなことを考えていたか？(されていたか?)

質問2：あなたが、震災のことばかりではなく、将来のことを考えられるようになったのはいつ頃で、何がきっかけか？

質問1	あなたが震災から1年後の2017年4月、2年後の2018年4月はどのようなことを考えていたか？(されていたか?)		質問2	あなたが、震災のことばかりではなく、将来のことを考えられるようになったのはいつ頃で、何がきっかけか？
時期	<1>2017/4/1	<2>2018/4/1	時期	<3>きっかけ
A	家庭菜園 自宅の修繕 地域のまちづくりの提案書を出した	区長として地域の復旧・復興活動をした 地域の活動が増え、家庭菜園はあまりできなくなった	2017.3	まちづくり協議会のイベントにより、違う地域からの平田の良さを教えてもらったとき
	自宅の修繕 震災後初めて旅行に行った	復旧は終わっていた 旅行をした		
B	自宅の修繕 震災後初めて旅行に行った	復旧は終わっていた 旅行をした	2017.6	2017年の同窓会の時、足を切断した人とかに出会って、その人とかに絵手紙とかあけていたときに落ち着いていた。ボランティアで助けてもらったから、ボランティアで返そうとした。
	旅行をした 家庭菜園 民生委員で震災関係の視察の対応 お法使祭実行委員会として動き始めていた	旅行をした 畑歩きに参加 民生委員として一人暮らしの高齢者のサポート お法使祭に向けて盛り上がっていた		
C	旅行をした 家庭菜園 民生委員で震災関係の視察の対応 お法使祭実行委員会として動き始めていた	旅行をした 畑歩きに参加 民生委員として一人暮らしの高齢者のサポート お法使祭に向けて盛り上がっていた	2016-現在 2017.5	部落のことや個人のことまで今までに知らなかったことを知りたがりいろんなことに挑戦すること お法使祭で部落の絆を深めるために実行委員として地域の方と協力して動いた
	区長になった 有線放送を復旧させようとした	有線放送の復旧に取り組み まちづくり協議会として避難所の確保に努めた		
D	区長になった 有線放送を復旧させようとした	有線放送の復旧に取り組み まちづくり協議会として避難所の確保に努めた	2017.4	区長になって地区でまちづくりを始めてから
	奥さんの病気の具合が悪くなった	ひとりでの生活 自宅の復旧		
E	奥さんの病気の具合が悪くなった	ひとりでの生活 自宅の復旧	2016.5	2016年5月のゴールデンウィークで息子が帰ってきて自宅を片づけて自宅での生活を再開させたとき
	石垣の修復をした 小屋の中の生活	自宅での生活 石垣は倒れたままのところもある 農業		
F	石垣の修復をした 小屋の中の生活	自宅での生活 石垣は倒れたままのところもある 農業	× 2017.6	農作業ができるようになってから。いまだにしっかりとできていない。 主となる家ができたとき
	一日も早く家に帰りたい 仮設住宅での不安 仮設住宅がギンギン鳴り出す	気持ち的には1年前と変わらない 家を建ててからの不安があった 人間性や底を知ってしまう		
G	一日も早く家に帰りたい 仮設住宅での不安 仮設住宅がギンギン鳴り出す	気持ち的には1年前と変わらない 家を建ててからの不安があった 人間性や底を知ってしまう	×	日常に戻れてなく、いまだにない
	区長としての働きが多かった 仮設の人や自立できる人が分かれてくる	役場の行事が多かったため仕事がありできなかった 地区外へ出て行く人もいることが気になる 家の修理はまだできていない		
H	区長としての働きが多かった 仮設の人や自立できる人が分かれてくる	役場の行事が多かったため仕事がありできなかった 地区外へ出て行く人もいることが気になる 家の修理はまだできていない	2016-現在 2017.4	有線放送が復旧したり周りの家が再建したりすると復興を感じる 区長をやめて仕事ができたら
	仕事で震災関係のイベントなどをしていた 災害ゴミなどの処分 震災関連の申請をしていた	元気なつもりであったが恐怖心があった 震災関連の仕事はしたくない気持ちも出てきた 家が傾いていて、前よりも体調を崩しやすくなった		
I	仕事で震災関係のイベントなどをしていた 災害ゴミなどの処分 震災関連の申請をしていた	元気なつもりであったが恐怖心があった 震災関連の仕事はしたくない気持ちも出てきた 家が傾いていて、前よりも体調を崩しやすくなった	2016.5 2016-現在	自宅のライフラインが復旧してから いつも通っていた道が復旧して通れるようになってから
	本堂が治るのかなど将来が不安だった 地区がどうなるのか	本堂が使えるようになったことでひと安心 他の所も復旧していないため素直には喜べない		
J	本堂が治るのかなど将来が不安だった 地区がどうなるのか	本堂が使えるようになったことでひと安心 他の所も復旧していないため素直には喜べない	2016.5 2017.6	子どもが学校に行けると決まった時。それにより、寺のことも考え出せた 解体か修理で悩んでいたが、お寺の修理をする決まった時
	個人的な生活の変化によるつらさはなかった 人間関係	生活面の復興は進んだ 個人主義が目立つなど喜びと同時にがっかりすることもある ささいなことの積み重ねがありがたかった		
K	個人的な生活の変化によるつらさはなかった 人間関係	生活面の復興は進んだ 個人主義が目立つなど喜びと同時にがっかりすることもある ささいなことの積み重ねがありがたかった	2016-現在	他に困っている方やほかの災害に合われた方から刺激を受けて、自分の被害の状況について黙っておくという気持ちが強くなった
	人間的な生活の変化によるつらさはなかった 人間関係	生活面の復興は進んだ 個人主義が目立つなど喜びと同時にがっかりすることもある ささいなことの積み重ねがありがたかった		

■はオーラルヒストリーと一致した内容

■は他者との関わりがきっかけ
■は生活環境の変化きっかけ

図-4 ヒアリング調査結果

(2) 復旧・復興に関する傾向

a) 1年後の考えに関するまとめ

ヒアリング調査で新たに得られた内容について分析を行う。震災が発生した1年後の2017年4月頃は、復旧作業に関することが多いことがわかった。その一方で日常生活を行う一面も見られた。

図-4<1>B, Cより、BさんとCさんは「旅行に行った」という共通の発言があった。また、図-4<1>A, Cより、AさんとCさんは「家庭菜園をした」というように趣味を嗜んでいたことがわかる。震災直後では見られなかった行動で震災から1年が経過したことで元々行っていた家庭菜園を再開できたと考えられる。

b) 2年後の考えに関するまとめ

震災が発生した2年後の2018年4月頃は、復旧作業がある程度終わり、復興活動を行う住民が存在する一方、自宅の復旧のみならず地区の復旧が済んでいないため将来への不安を持つ住民や素直に自宅の復旧を喜べない住民もいた。

図-4<2>A, Cより、復興に関する活動を行っていた。その一方で、図-4<2>Hより、地区の将来に不安を持ったり、図-4<2>Jより、地区の復旧の様子を気にしていたりするような状況もあった。これらの住民は震災から2年が経過し、他の対象に気を向ける余裕があったことがわかる。また、図-4<2>Iより、震災から時間が経つことで発生する気持ちの変化や自宅に入ってから生活をして時間が経つことで積み重なった影響がみられるようになった。

(3) 将来を考えられたきっかけに関する分析

追加ヒアリング調査で得られた内容のうち、将来を考えられたきっかけがあると答えた住民のうち「他者との関わり」と「生活環境の変化」の大きく2つに分類した。この分類を図-5に表す。

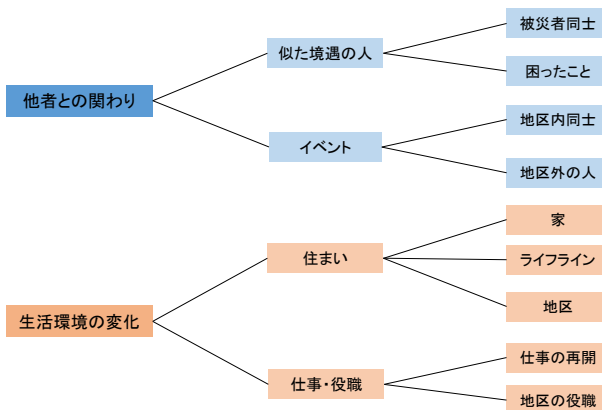


図-5 復旧・復興におけるきっかけの種類

a) 他者との関わりがきっかけに関する分析

図-4<3>A, Cのように、他地区の住民や大学関係者との交流で平田地区の魅力を知ったことや、地域の祭りで交流を深めたことをきっかけとしていた。この2つのきっかけはイベント内での他者との関わりにおいて生じたものである。その一方で、図-4<

3>B, Kのように気持ちの変化を述べた。この2つのきっかけは、似た境遇の人との関わりにおいて生じたものである。

b) 生活環境の変化に関する分析

図-4<3>E, F, Hのように震災による生活環境の変化として一番大きかったのが住まいであることがわかる。また、図-4<3>Jより、子どもの心配と仕事の場の将来への不安が気持ち的に大きかったと考える。

(4) 災害復興プロセスの分析

質問1, 質問2より、住民それぞれの被害の大きさや環境などの個人差による背景により、復旧・復興の時間差があると考えられる。それにより被災者同士での人間関係で生じる問題も見られた。

「人間の底を知ってしまう」というように仮設住宅から自宅が復旧して地区に戻る際に、仮設住宅に残る人は地区に戻る人に対して素直に喜ばれないこともあると述べた(図-4<2>G参照)。これは仮設住宅に残る側と地区に戻る側で復旧の時間差があり、この復旧の時間差により生じた問題であると考えられる。この復旧の時間差に関して、周りが復旧・復興が進んでいるように見えるが、実際は復旧が遅れている場所もあり、地震に対してマイナスなところなど言いたいことは言えずに抑え込んでいる人もいと述べた(図-4<1>K参照)。

以上より、復旧・復興の時間差により、復旧が進むのが遅い人が取り残されていく、または、復旧が早い人を素直に喜べない気持ちが生まれていると考える。これらの背景の個人差から生じる課題について図-6に整理した。

これらの1年後と2年後の復旧・復興やどのような時期に将来を考えられるようなきっかけが存在したかなどそれぞれの時期や出来事に違いがあった。

また、復旧・復興過程において、イベントや似た境遇である「他者との関わりがきっかけ」と住まいや仕事の場などの「生活環境の変化がきっかけ」の2つが大きく存在し、これらが復興にとって重要であることがわかった。

5. おわりに

(1) まとめ

オーラルヒストリー調査を実施したことで、当時の曖昧な記憶や被災者しか体験していない情報を収集する点で有効であった。オーラルヒストリー調査で収集した内容はどの項目においても被災者ごとに被災体験や記憶が異なり、それぞれで課題が明らかとなった。追加ヒアリング調査では、オーラルヒストリー調査で多くを収集できなかった震災から1年後と2年後の考えや行動がわかった。将来を取り戻すきっかけとして「他者との関わりがきっかけ」と「生活環境の変化がきっかけ」の2つに大別できた。

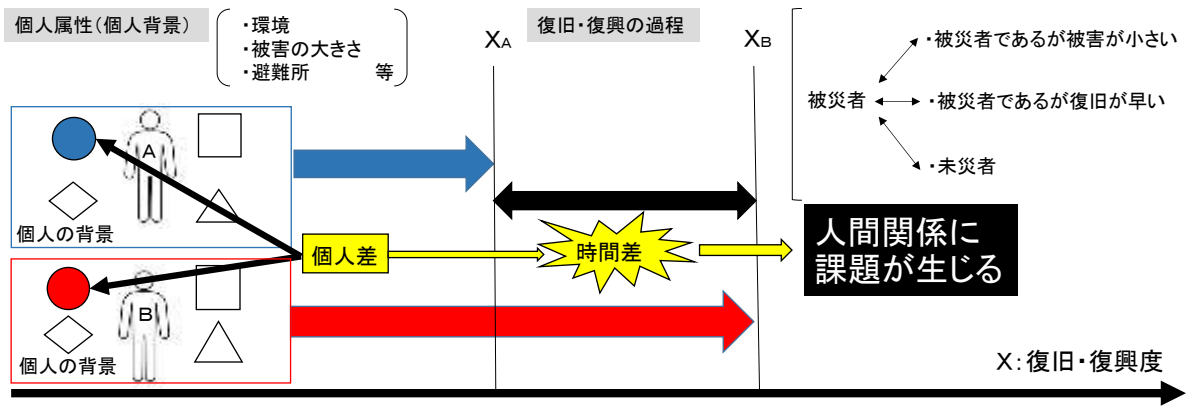


図-6 背景の個人差から生じる課題

本研究の調査により、都市近郊の農村コミュニティである益城町平田・柳水地区では、避難所の地区内・地区外などの場所における課題、地震による人間関係における課題、復旧・復興の時間差による課題の3つが挙げられる。震災体験の事実と気持ちを住民の生の声として記録誌等を作成するなど、災害復興プロセスを地区内・外に共有することで、震災の記憶の風化を防ぎ、これらの課題を許容することで次に災害が発生しても、よりよい対応をして防災・減災、そして二次的な被害の抑制が可能となる。

(2) 今後の課題

本研究では、対象地区の11人のみ調査を行った。これらを災害復興プロセスとして地域住民に共有することで震災体験を風化させることを防ぐ必要がある。また、復旧・復興が進んでいる中、住民の意見を反映させるためのまちづくりを行う必要があると考えている。

参考文献

- 1) 中神賢人, 後藤春彦, 田口太郎, 山崎義人: 口述史調査記録のデータベースシステムの開発に関する研究—まちづくり・オーラルヒストリーを事例として, 日本建築学会技術報告集 10 巻 20 号 301-306, 2004.
- 2) 西村多美, 柴田祐: 熊本地震の応急対応期の集落における人のつながりが果たした役割に関する研究, 農村計画学会誌 36, 289-295, 2017.
- 3) 益城町ホームページ: 住民基本台帳人口 2019.2.5 <https://www.town.mashiki.lg.jp/kiji0032535/index.html>
- 4) 気象庁 2019.2. 5 https://www.jma.go.jp/jma/menu/h28_kumamoto_jishin_menu.html
- 5) 熊本県益城町: 平成 28 年熊本地震益城町による対応の検証報告書, 2017.
- 6) 熊本県危機管理防災課: 熊本地震等に係る被害状況について
- 7) 益城町町史編纂委員会: 益城町町史, 通史編, 1989.
- 8) 益城町復興まちづくり計画, 避難路・避難地編 2018.

(?)

STUDY ON SHARING OF DISASTER RECONSTRUCTION PROCESS FOR TRANSMISSION OF MEMORY AND EXPERIENCE IN KUMAMOTO EARTHQUAKE

Kenta KOGA and Naoto TANAKA

It pasts almost three years from the Kumamoto earthquake that occurred in April, 2018. It is said that transmission of memory and experience is important for clarification of problems in disaster recovery and reconstruction, reduction of the damage, prompt recovery and reconstruction and lesson for another area. The aim of this research is to describe the actual situation of the disaster reconstruction process in the stricken area and develop a system to share it. So, in the Hirata/Yanagamizu district of mashiki town, Kumamoto prefecture, the memories and experiences of eleven inhabitants are summarized by oral history method. Using the oral history method, eleven inhabitants' actual memories and experiences are observed. That contents are partial just after a disaster, the situation of the evacuation, the intention to reconstruct their living. And there aren't the process of reconstruction. Therefor by the interview survey, it is clarified the reconstruction process. The turning point of the reconstruction is classified mainly to two kinds of "relation with others" and "the change of the living environment"